

「場所の喪失」と〈土地〉の顕現

阪本，英二
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15685>

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.87-96, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：

「場所の喪失」と〈土地〉の顕現¹⁾

阪本 英二²⁾ 九州大学大学院人間環境学府

Loss of place and presence of “Earth”

Eiji Sakamoto (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

As a continuation of my previous paper (Sakamoto, 2004a), this paper attempts an interpretation of “Place” based on experience, in which I (the author, as Dasein) am in “Kinshai-dori” - a shopping mall - and understand it as “my place.” In the former paper, it was interpreted that the phenomenal place is the world, which unfolds along with the existential-history that belongs to the transcendental “Earth,” and that the sense of “Place” itself is the encounter with “Earth.” The purpose of this paper is to show a clearer interpretation of the relationship between this existential-history and “Earth.” Based on the following two facts, “Earth” is interpreted as the original-horizon that makes place-generation possible. One fact is that, in the existential-upset-situation of “loss of place,” the existential-history presents itself in the place even though no concrete object is present. The second fact is that the place is experienced as usual even though I am not present all the time. Finally, from the point of view of how “Earth” is projected, topological interpretations about the concept of understanding and ontological interpretations about the “loss of place” are discussed.

Keywords: place, existential history, earth (Erde), ontological interpretation, loss.

1. 〈場所〉への問い

心理学は一般に人間の現象を「図」として注目する学問であるが、それが仮に人間に関心の向けられた学だとしても、その図を規定するはずの「地」、すなわち「場所」の議論も必要であろう。しかも、図と地を相互に浸透したものと捉えそれをひとつの単純な「絵」のように思索する「原初的な人間環境一学」が必要である。人間は何らかの場所に存在し、何らかの場所に住まう者だからである。

居場所問題の基礎的問いでもありうる〈場所〉の存在論的解釈に、筆者（阪本、2002、2003、2004a）はこれまで取り組んできた。その問いは、「〈場所〉³⁾とは、それそのものとしては、果たして一体何を意味するのか」である。この問いの構造及び性格とそれに対する思索の方

法の詳細については阪本（2004a）を参照されたいが、その要諦についてはここでも触れておく。

① **場所論的差異** 〈場所〉の存在論的解釈は、ある特定の地域を対象にしてその具体的な諸相を扱う存在的研究とは区別される。このような研究では〈場所〉そのものについての素朴な了解に規定されて行われており、〈場所〉自体が問われることはないからである。

② **場所の了解と実存** 〈場所〉の意味が不明である一方で、〈場所〉というものを日常的に了解して生活している。つまり、現存在である人間には、おのれの（存在する）場所とともに、かつその場所を通して、この場所が自己自身に開示されている、ということがそなわっている。また、このような現存在は自己自身をいつも自己の実存から了解している。

③ **実存論的分析論** そこで、〈場所〉の意味は現存在の実存性の分析を通して行われるのが妥当である。つまり、「ここは私（おのれ）の場所である」という現存在の了解について、現存在が「ここ」で生きているということに即して、「ここ」がその現存在にどのような実存的意味をもって生きられているかを開示する、さらにその生きられ方の分析を通して〈場所〉一般の意味は開示されうる。

④ **生きるという方法** 具体的には、「思索者自身（筆者、以降「私」と表記⁴⁾）」と「思索者（筆者）自身の日常的かつ実存的な場所」が手がかりとされる。なぜ

¹⁾ 本論は九州大学大学院人間環境学府に提出された修士論文（2002）の一部について加筆・再編したものである。

²⁾ 本論の執筆にあたり、九州大学大学院人間環境学府の南博文教授と菊地成朋教授から多大なご指導を賜りました。こちらから御礼申し上げます。

³⁾ 本論では、「現象している具体的な場所」と「場所そのもの」を区別して議論する必要がある。そこで前者を「場所」、後者を〈場所〉と区別して表記することにする。

⁴⁾ しかしこれは「コギト（思惟する自我）」や心理学的な「自己」を意味しない。あくまでも「筆者という現存在」を意味する。

なら、「思索する者」すなわち「現象学をする者」が問いを「わがもの」にしながら自らの生において問うという「生きるという方法」(阪本, 2004b)によって、生き生きとした存在論的問いは可能になるからである。またその具体的な場所とは「箱崎商店街きんしゃい通り⁵⁾」(以後「きんしゃい通り」)である。

⑤ 現象学的記述 思索の具体的表現は現象学的記述として呈示されるが、それは2種類の記述で構成される。1つ目は、あるまとまりのある経験が自ずと開示されるように記述された「エピソード的記述」であり、2つ目はエピソード的記述で開示される経験において「場所」がいかに生きられているかを実存論的に問う「脱自的思索」である。

2. 思索は今どこを辿っているか—阪本(2004a)の要約

本論は、阪本(2004a)に引き続いて議論が進められる。そこで、まずこれを要約し、〈場所〉の存在論的解釈がいまどの段階にあるのかを確認しておく。

「私の場所」(きんしゃい通り)の現象的意味

まず、きんしゃい通り([CUBE]⁶⁾が「ちりのみ⁷⁾の場所」かつ「私の場所」として開かれているときの、その現象的な意味が次のように開示された。

きんしゃい通りが「私の場所」として了解されているとき、私は住まっている。つまり、きんしゃい通りは「いつもどおり」というひとつの纏まった出来事として開かれ、また対処され、その在りようには私は融け込んでいる。また「ちりのみ」はきんしゃい通りの人々と私が共存しながら行われており、その準備作業においては様々な道具や手順が「ちりのみ」で関連したものとしてその都度私に出会われ対処されている。このようにして、

⁵⁾ きんしゃい通りは福岡市東区箱崎1丁目にある、全長約180mの一般公道であるが、日中は自動車の進入が禁止され商店街となっている。主に生鮮食品を売る商店が建ち並んでいる。

⁶⁾ 私がきんしゃい通りと出会うきっかけとなった「箱崎商店街活性化プロジェクト」において、通り内の空き店舗を利用して開設された「立ち寄り処」である。きんしゃい通りで特に「私の場所」と呼べる重要な場所であった。2003年秋に来街者用トイレに改装されてしまったが、2004年9月現在も[CUBE]の名が残ると共に、「ちりのみ」道具が奥の物置スペースに保管されている。

⁷⁾ これはきんしゃい通り内の商店から肉、魚介類、野菜などを調達し、七輪で熾した炭火の上で焼き、それを肴にビールなどを飲むという飲み会である。「ちりのみ」は、約4年間不定期的ながらも現在も継続中である(詳細は阪本(2004a)を参照のこと)。

⁸⁾ 阪本(2003)は別の論考において実存的歴史の歴史性を議論している。

⁹⁾ この概念は、現象学の議論においてしばしば〈大地〉(Erde / Earth)と呼ばれるものとはほぼ等しいと考えてよい。

きんしゃい通りには「ちりのみ」という世界が展開されている。

〈場所〉の存在論的解釈

以上のような現象的「場所」の開かれ方・生きられ方を解釈することを通して、〈場所〉そのものの存在論的解釈が試みられた。

この解釈において「実存的歴史⁸⁾」という概念が提出された。実存的歴史とは、私の生に直接意味を与える実存的な既往(過去)としての歴史であり、「かつてしかじかのことがあった」と淡々と記録されるような史学的事実としての歴史(表象的歴史)と区別される概念である。

現在の私は、「場所」の了解において、この実存的歴史を現在に選択されうる意味として受け取っている。実存的歴史は現在そこで生き生きと展開する世界を可能にし、その世界の在りようそのものに結実している。また実存的歴史は常に動的に将来に向けられており、刻々と沈殿しつつもある。現象的な「場所」の了解は実存的歴史の了解に基づいてこそ可能であり、このように展開する世界の在りようそのものがまさに現象的な「場所」である。

さらに、この実存的歴史は、現存在がある「土地」に赴きそこに開かれる「場所」に自らが存在することにおいてはじめて甦る。すなわちある「場所」が開かれうるのはある唯一の「土地」の上に限られている。このことから実存的歴史は根源的には〈土地〉⁹⁾に属していると思ふことが可能であり、「場所」は〈土地〉との根源的次元における出会いに基づいていることになる。

〈場所〉は〈土地〉との出会いである。

大雑把な要約であるが、以上が阪本(2004a)が辿りついた〈場所〉の解釈である。

本論の問い

以上の〈場所〉の解釈において、実存的歴史といったものがいかに〈土地〉と関係するのかは、紙幅の都合もあり阪本(2004a)では十分に述べられず未だ不明瞭なままである。本論はその解釈を詳らかにすることがその中心的課題である。

3. 存在者の欠如による実存的歴史の顕現

実存的歴史や〈土地〉の存在は、実は、いわゆる「喪失」と呼ばれる「場所」の欠如の体験を通して開示されている。阪本(2004a)においては、主に「場所」に私が「融け込む」という平均的で日常的な側面に光を当ててきた。すなわち、実存的歴史が実践的行為のうちで対処されその「場所」に住まうことができるという側面であ

る。しかし、この「場所」の在りようにおいては、実存的歴史も〈土地〉もそれ自身としては現象しない。なぜなら、実存的歴史が現在に脈々と生きられる意味として対処されてしまっているからであり、むしろその意味が充実することによって現象している具体的な「存在者」そのものに目を奪われている。実存的歴史や〈土地〉の存在は、「場所」の欠如的体験においてようやくおのれを示すのである。そこでまず、「場所」に住まうことができないという欠如態（故障状況）として開かれる「場所」に光を当てることから思索を開始したい。

〈エピソード的記述〉【S】¹⁰⁾の跡に

きんしゃい通り内の【S】があった場所（空き店舗）に、健康器具の体験販売店がやってきた。「生体電子」とかいうものを体内にとり込む機械だという。椅子の上に黒い座布団のようなものが敷いてあり、そこからはコードが伸びて大きな機械に繋がっている。椅子の上に座って、その機械から飛んできた電子を体内にとり込んでやると、血液がサラサラになったりするらしい。マイクロ波を当てる機械もあった。膝に当てたりお腹に当てたりして、「細胞自体から熱を発生させることで新陳代謝を促す」のだという。

先日、商店街の会長でもあるYさんから「いかがわしい業者だったら、（営業を）絶対認めない。でも今度来るところはちゃんとしたところだから、それだったら構わないよということで認めたー」という話を聞いていた。そこで私は、この店が旧【S】にやってきたのを確認すると、早速中に入っていったのである。それは、【S】がきんしゃい通りを出て行って以来、はじめてそこに足を踏み入れた時だった。

営業者である50代くらいの男に話を聞きながら、電子取込器とマイクロ波を体験した。私はこの間に、この営業者がどのような人なのか、この商売はどのような手口なのか、実際には何をするのかを、厳しくチェックするような感じで一つ一つ話を聞いていた。そして私も彼に質問も投げかけ、彼を試した。私は彼のテリトリーに入っていたにもかかわらず、たじろぐどころか、逆に挑戦的でさえあった。

Yさんから事前に話を聞いていたこともあってか、確かに彼はあくどい業者のように思われなかった。「1ヶ月で3台も売れたら十分賄える」らしい。とにかく「たくさんの人に体験してもらって、続けてもらって、その中で自分から欲しいと思ってくれる人が出てくるの

を気長に待っている」つもりのようだった。

「大丈夫そうだな」と、私はまるで誰かに報告するかのようにこころの中でつぶやいた。

しかしこの旧【S】は、かつてのカウンターや厨房は跡形もなく、油で茶色くなった壁紙がエアコンのあった位置だけ白くなっていて、とにかく痛々しかった。そして「ここはこんなに狭かったかな」と少し信じられない気分だった。「とりあえず私はこの営業者よりもこの場所が重いのだろうな」と、私のこころも重くなって家路に向かった。

〈脱自的思索〉

【S】のあった場所

すでに【S】は移転してしまい、もはやそこには韓国料理屋の営業を可能にするものは何1つ存在しない。ただ壁紙に名残が残っているだけである。それでも私にとってその「場所」は、「健康器具体験販売店のある場所」というよりもむしろ「【S】のあった場所」と表現されるのが実に自然である。このことは、【S】という実存的歴史が立ち現われてこの「場所」が開かれていることを如実に物語る現象である。

この健康器具体験販売店が来るや否や、私はその店をあたかも審査するように訪れる。男は得意げにいろいろな機械の説明を私にしてくるのだが、私は「たじろぐどころか、逆に挑戦的でさえあった」。そして「私はこの営業者よりもこの場所が重いのだろうな」と思う。そこで私がそのような存在するのは、そこが「【S】のあった場所」だからだ。私には彼よりも重厚な実存的歴史がその「場所」に現成していることを、私はここでありありと自覚している。私に開かれている「場所」においては、男はむしろ異質な新参者として存在するのであって、占有権（所有権）というものは全く表面的で軽薄なものに過ぎないようにすら思われてくる。

露骨に立ち現われてしまう実存的歴史

とはいえ、もはや【S】が存在しないことも確かである。現在そこに切り開かれている世界は「健康器具体験販売店」であり、韓国料理屋ではない。それでも私には【S】という実存的歴史が立ち現われ、それに出会っている。しかしこの実存的歴史をそのままくいまーこころで脈々と生きられる意味とすることができない。当然のことだが、もはや【S】という世界はそこに切り開かれないのである。

それでも私は、立ち現われ出会われる実存的歴史を引き受けざるを得ない。「おねえさん」¹¹⁾や「石焼ビビンバ」やそこで起こった様々な出来事が、勝手にこころに湧き起こってくる。そしてそれらは、身体全体にのしかかってくるような、あるいは胸を押し付けてくるような「重

¹⁰⁾ きんしゃい通り内で2001年夏まで営業していた韓国料理屋で、私にとって重要な「場所」のひとつでもあった。この店の移転を契機として、〈場所〉への問いが自らに贈られていることに気づくことになった。詳細は阪本（2004a）を参照のこと。

¹¹⁾ 【S】の経営者の通称。

さ」を伴っているのである。まさにそれは、【S】という実存的歴史が露骨に目の前に据えられるがごとく立ち現われ自らの身体にのしかかってくる体験、という以外にない。

〈エピソード的記述〉3ヶ月の後に

以来、私とおじさん（業者）は近所のよしみで仲良くなっていた¹²⁾。おじさんは気さくな人だった。

ところが3ヶ月ほど経ったある日の夕方、私がきんしゃい通りに赴くと、まさにこの時、健康器具体験販売店は大がかりにその内装を壊されている最中であった。突然のことだった。おじさんに話しかけると、「今日で終わりだ」という。おじさんは店を壊しに来た人と一緒になって店の片づけをしていた。私はどことなく潔さのようなものを感じた。まるで出て行くべき場所に何の未練も残さないかのようにであった。私はその様子を[CUBE]から眺めながら、「今日という日をおじさんはどのように迎えたのだろう」と思った。

営業を始めてからその日でちょうど3ヶ月たったという。「1ヶ月に3台も売れたら十分」と言っていたが、3ヶ月で1台も売れたかどうか、やはり大して売れなかったのかもしれない。しかし、この業種特有のうさん臭さは、おじさんの人柄もあって、もはやこの時には消えているようだった。逆にそれだからこそ、きんしゃい通りを出て行くことになったのかもしれないのだが、本当に器具のよさを理解してもらって「自分から欲しいと思ってくれる人が出てくるのを気長に待っている」というおじさんの誠実さは、多くの人に伝わっていたようだった。「この人の生き方は毎日のようにそこに通ってきたおばあちゃんにはちゃんと伝わっている」と私は自信を持って言える気がした。

壊されて何も無くなってしまったそこに、この時もまた「【S】」が見出されるのだった。【S】の厨房を、「おねえさん」を、「石焼ビビンバ」を、私はそこに見出だすのだった。しかし、おじさんの生き様や様々な人々がここにいたこともまた、同時にここに浮かび上がってくるのだった。

最後にシャッターを閉め、おじさんは周りのお店一軒一軒にあいさつをして帰っていった。私にも大きな声でこう言ってくれた。

「論文がんばって書いて、はよ卒業するばい！」

私は切ない気分でこう思った。「おじさんがいなくなったとしても、その生き様は失われない。それはここに住まう人々に、少なくとも私には、生き続けられるだろう」。【S】と健康器具屋という歴史と共に、これからも私にこの「場所」が生きられていくであろうことが、自分でよ

くわかった。この場所は私には再び重かった。その重さは確実に増したようであった。

〈脱自的思索〉

実存的歴史の沈殿

以来3ヶ月間、常に【S】をありありと意識し重さを感じていたわけではない。その間に健康器具体験販売店はそれなりに私に対処されていった。振り返れば、その対処を可能にしたものは、常にそこに健康器具体験販売店の営業を目にしていたことや、おじさんの人柄が次第に理解されていったことという、それ以来の様々な実存的歴史である。健康器具体験販売店となってからも、このような実存的歴史が「場所」の意味に沈殿され続けていったのである。この新たな実存的歴史がその「場所」を「健康器具体験販売店」として存在させて対処されることを可能にしたのであった。しかし【S】という実存的歴史が失われたわけではない。それはそれとして依然失われることなく沈み込んでいる。

再びシャッターが閉められるとき、3ヶ月前にシャッターが開いた時と同様に「場所」が重く実感されてくる。店内に何もなくなってしまい、実存的歴史は、それが現在に脈々と生きられ対処されるための「家」を失い、再び露骨に目の前に据えられるがごとく立ち現われてきたのである。しかしその実存的歴史は、【S】と健康器具体験販売店の両方が含みこまれ編み込まれていた。だからこそ、場所はさらに重くなったと実感されてきたのであろう。

存在者の欠如としての「場所の喪失」

一般に「場所の喪失」と言われる時、それはこのような存在者の欠如に言及している場合が多いように思われる。つまり、行きつけの店の店構えや今まで住み続けてきた家屋などの具体的な構築物が壊されたり奪われたり閉じられたりすることに伴って、「場所を失った」と思われてくる場合である。しかしこれをより根源的に解釈するならば、「場所の喪失」とは単に実在物の喪失を意味するのではなく、むしろ実存的歴史が〈いま—ここ〉で脈々と生きられる意味となって対処されない、つまり実存的歴史の「家」の喪失という実存論的構造が認められる。ゆえに、実存論的には、「場所の喪失」は「場所」が喪失されているどころか、むしろ濃密に〈いま—ここ〉という「場所」は生きられているのである。日常的に住まわれる際に実存的歴史は対処されてしまうので、そこが「住まわれる場所」として開かれていたことに気づくのは、あるいはそこに実存的歴史が沈殿し続けてきたことに気づくのは、常にこのような欠如態におかれた時である。つまり、たいていは「場所の喪失」によってはじめて「場所」の存在に気づくことになる。そしてこの

¹²⁾ 健康器具体験販売店（旧【S】）は、私が拠点としていた[CUBE]の斜向かいにある。

時に露骨に立ち現われてくる実存的歴史やその時に実感されてくる重さこそが、それまでに「住まわれる場所」を可能にしてきたものと考えてよいだろう。

4. 根源的地平としての〈土地〉

実存的歴史の持続の謎

ところで、前章の2つのエピソードの記述において、〈いまここ〉はすでに健康器具体験販売店であり【S】という韓国料理屋は存在しないにもかかわらず、〈いまここ〉においてこそ【S】の実存的歴史が甦っているという事実がある。それでは、この事実を基づけ可能にしている契機は何だろうか。言うなれば、この問いは実存的歴史の持続の問題である。

ひとはこれを「健康器具体験販売店は【S】のあとに同じ位置に開店したからである」と説明するであろう。しかし、同時に存在しない2つの店を、なぜ同定することが可能なのだろうか。あるいはその「位置」といったことでさえ、それは現象している「場所」の世界に基づいて同定することが可能なのではあるまいか。実際、開かれる世界が全く異なっていれば（災害による破壊や道に迷うといった日常的体験を想像しても、これは単なる思弁的想定ではないことがわかるだろう）、われわれは容易に「位置」を同定することに混乱をきたすことがあるわけである。とはいえ、世界は混沌としているよりはむしろ秩序付けられているのであり、われわれはむやみやたらに路頭に迷って動き回っているのではなく、どの方面にどのような「場所」があるのかを見込んでいく。われわれはたいてい様々な「場所」に容易に赴くことができるわけである。

このように考えれば、この問いは容易なものではない。しかし、これが明らかにされなければ問いは存在的な「場所」の圏域を動くばかりであり、〈場所〉そのものの存在論的な意味に迫るためには、以上の問いに取り組む必要がある。

記憶と実存的歴史の相違

この問題は、しばしば主観の心理的記憶による意味付けによって説明される。しかし果たしてそれは妥当な解釈であろうか。

“内世界的存在者は、世界の内部で出会うかぎり、もともと歴史的に存在しているのであって、それらの歴史は、《心》の《内面》の歴史にたんに随伴するだけの《外面》というようなものではない。”（ハイデッガー、1994/1927下巻、p.333）。

以上の引用に端的に表現されているように、実存的歴史は心理学における記憶概念とは、次の点で明確に区別される。すなわち、実存的歴史は、脱時間的に表象され

るものではなく、〈いまここ〉でまさに生き生きと展開されつつあることである。すなわち、いわゆる主観によって「場所」が構成されるのではなく、むしろ「場所」は私に与えられる（発現する）。それゆえ記憶といった認知的表象によって「場所」が「意味付け」られていると考えるべきではない。記憶として表象されるのも、そのような心理的作用以前にすでにその「場所」がその「場所」として自ずと開かれていることに基づいている。すなわち実存的歴史の展開と「場所」の現象は同根源的であり、それは主観を超越している存在論的生起である。

記憶に代わり、むしろ次のように「場所」に定位して問う必要がある。すなわち、或る実存的歴史が或る「場所」においてこそ持続的に展開し、その「場所」が唯一の「場所」として構成されているのは、いかなる存在論的契機によるのか、という問いである。

問いが抱えるアポリア

この問題はアポリアを抱えている。これまで議論してきたように、「場所」あるいは「場所」に存在する様々な存在者は現存在に実存的歴史が受け取られることによって解釈される。しかし一方で、実存的歴史は「場所」や様々な存在者において現成している。つまり、実存的歴史と「場所」は両義的に規定されるという関係にある。

これに関してハイデッガー (ibid.) は次のように述べている。“《世界—歴史》(《Welt-Geschichte》) というこの表現は、[中略] その二重の意義に注意する必要がある。すなわち、それは第一に、現存在との本質的な実存的な統一態における世界そのものの経歴を意味する。それと同時に、事実的に実存する世界とともにいつもなんらかの内世界的存在者が発見されているという点からみて、世界＝歴史という表現は、第二に、用具のおよび客体的存在者の内世界的《生起》をも指している。じっさい、歴史的世界は事実的には、内世界的存在者の世界としてしか存在しないのである。道具や製品そのものにおいて《生起》する事柄は、特有の運動性格をそなえていて、その性格は従来まったくの暗がりのうちにつつまれている。[中略] しかし、ここでは、世界＝歴史的経歴の存在論的構造の問題に、これ以上深入りすることはできない。” (ibid., pp.333-334)。

このようにハイデッガーは、現存在の実存がすでにそれ自体歴史的であるとその実存論的構造にまでは言及するものの、世界（「場所」）が、しかもあるひとつの世界が、生起する謎までは立ち入っていないのである。

実存的歴史と「場所」の関係ということで議論する道がさしあたり閉ざされている以上、この問いに取り組むためには、新たな地平を模索しなければならない。

先ほど、実存的歴史と「場所」の現象の超越性に触れたが、この超越性という性格に迫ることが何か示唆を与

えるのではないだろうか。それにはまずこの超越性といったものを具体化しておかねばならない。

実存的歴史の超越性（共同性）

阪本（2004a）の「ちりのみの手引き」のエピソードの記述でも明らかにされたように、私はきんしゃい通りで様々な人々と共存している。このようなきんしゃい通りは、私がそこに存在しなくとも、私を離れて常にそこで誰かに生きられ変化し続けているように思われる。しかし、そのように変化し続けているきんしゃい通りでも、私が訪れた際にはその都度「私の場所」としてそこに住まうことができる。この出来事は明らかに「場所」が私を超越して開かれていることを示している。具体的な体験をもとに考えることにする。

〈エピソード的記述〉「Yさん、ここは私の場所です！」

2000年夏頃の[CUBE]での出来事である。当初[CUBE]には様々なものが展示されており、「プロジェクト」のメンバーのうちの誰かが常駐していた。しかし授業や他の様々な仕事に追われるうちに、メンバーは[CUBE]から遠ざかるようになってしまった。しかし朝晩のシャッターの開け閉めは、[CUBE]の向かいに住んでいるクリーニング屋のYさんをお願いしてあったので、特に問題はなかった。

しかしそんなある日、Yさんは[CUBE]に展示されているものに新鮮さが欠けてきたことを感じ始めたようで、メンバーに情報の更新をするよう私を窓口にして頼んできた。しかしわれわれメンバーはその意欲が十分に奮い立たず、そのまま幾日か経過してしまった。[CUBE]にわれわれが現われなくなったことで、Yさんはその望みをわれわれに抱くのをやめたのだろう、ついにYさん自らが[CUBE]に手を加え始めた。どこかの会社から机を引き取ってきたり、置かれているものの位置を変えたり処分したりした。

それ以後も、私が金曜日に「ちりのみ」をやり[CUBE]を訪れる度に、そこはその都度微妙に変化していた。この[CUBE]の変化を目の当たりにして、私はその度に「Yさんだ…」と直感した。そして彼の拡張した管理行為にしないで不満を覚え始めた。「Yさん、ここは私の場所です！」と叫びたい気分であった。

この時の私は、[CUBE]に手を加えられることを素直に受け容れることができなかった。まるで自分の部屋が私がない間にいじられてしまうような気分であった。しかし[CUBE]の維持管理にYさんが尽力くださっていることについて、一方で私は感謝していたので、「やめてください！」とももちろん言えるはずもなかった。私はこの2つのアンビバレントな感情に板挟みになり。この不満は捌け口を見つけることなく、潰されていく他なかつ

た。しかし、細かなちりのみ道具の位置が変えられることだけは、私は譲ることができず、それらが移動されるたびにいちいち元の位置に戻した。

〈脱自的思索〉

「場所」を通してYさんを直感する

このような[CUBE]の変化はしだいに対処されていたが、一方でこの出来事は、私と同様にYさんにとっても[CUBE]が彼なりの「場所」になっていることを（私なりに）理解するようになっていった契機でもあった。

Yさんは[CUBE]の向かいに住んでいることもあって、私は彼と頻繁に話をしてきた。最初にYさんが[CUBE]に手を加えた時は、私は直接彼に尋ねて事情を確認したものの、それ以後の変化については、私はYさんの姿を見てもいなければ会話を交わしてもいない。それにもかかわらず、[CUBE]の変化を目の当たりにしただけで、私は「Yさんだ（Yさんが手を加えたのだ）…」と直感している。ここで実際にYさんが[CUBE]に手を加えたかどうかは問題とならない。なぜなら、私にそのように[CUBE]が開かれたことは、それはそれとして如何ともしがたい事実だからである。「Yさんだ…」と直感した時その「場所」に意味を与えた実存的歴史は、[CUBE]の「情報の更新をするよう」にYさんが私に頼んできた経緯とそれに続く彼の「拡張した管理行為」である。この実存的歴史が持続して展開し、[CUBE]が変化する度にそれが「Yさんが手を加えた」という意味となって「場所」が開かれるのである。

実存的歴史の共同性と超越性

私はYさんと共存しながら「私の場所」として[CUBE]に住んでいる。ここで肝心なことは、私がその「場所」に常に存在しなくても、「そこで生きるYさんによって脈々と新たな世界が開かれており、それが再び実存的歴史として刻々と沈殿し続けている」と私に直感されてくることである。私は直接Yさんと会話をしなくても、Yさんと共に[CUBE]に住んでいることが「場所」を通じて確認されてきたわけである。逆に、私によって沈殿した実存的歴史もYさんに共有されていた可能性がある。すなわち、Yさんが[CUBE]に手を加えたにもかかわらず、それでも「ちりのみ道具」が処分されることなく残っていたことには（位置は変わっていたけれども）、「ちりのみ」という実存的歴史が[CUBE]に沈殿し、Yさんにもそれが彼なりの意味となって対処されていることが見て取れるのである。

そこで私はこの「ちりのみ道具」を元の位置に戻しながら、かつて私自身によって沈殿された「ちりのみ」という実存的歴史に出会いそれを甦らせ、再び[CUBE]は

「ちりのみの場所」として開かれるのである。

この議論で明らになることは2点ある。1点は、実存的歴史は私を超越して沈殿し続けていることであり、もう1点は、その超越性の1つの位相は共同性であり、実存的歴史は私に閉じた認知的表象といったものではなく、むしろそれはそこに住まう人々の実存において共同で構成されいくらかは共有されていると見なすことが可能ということである。

「場所」の脱自的根源的地平としての〈土地〉

このように「場所」は私を超越して生起する。それにもかかわらず、「あちらに行けばきんしゃい通りがある」といったように、ある異なる「場所」から当該の「場所」が開かれる「方面」といったものを了解し、その「場所」に再び赴くことが可能である。またその際に、そこに開かれる世界が以前と異なっていることがあるにもかかわらず、「同じ場所」として投企され同定される。この超越を可能にし、また規定しているのは、確かに根源的時間の脱自的統一（時熟）（ハイデッガー、1994/1927）という実存構造ではあろう。しかしそれでも、「場所」はある実存を契機としてどこにでもやみくもに開かれるわけではなく、今まで議論されてきたように、或る実存的歴史は或る限定された「場所」においてこそ展開されるのである。われわれはいま「場所」の構成を解釈するにあたって、時間性とは異なった脱自的根源的地平、〈土地〉（〈大地〉）に辿りつかざるをえない。

「場所」の生起、実存的歴史の超越性を可能にするひとつの契機は〈土地〉である。すでに存在しないにもかかわらず【S】の実存的歴史が立ち現れ、あるいは直接変化を目の当たりにせずともその意味が理解されて【CUBE】が開かれ、あるいは遡って、きんしゃい通りが「いつも通りの場所」として持続的に開かれるのは、つまりは実存的歴史が超越しつつも持続し留められている契機は〈土地〉である。実存的歴史は時間性のみならず〈土地〉にも属するのである。逆に〈土地〉がそこに生きそこに立つ者の実存において住まわれることにおいて、実存的歴史が生き生きと甦りその「場所」を可能にしている。この実存構造は、〈場所〉そのものの根源的意味と捉えてよいだろう。〈場所〉とは〈土地〉との根源的次元における出会いを意味しているのである。

〈場所〉は土地との出会いである

ここでようやく阪本（2004a）に接続する。現象的な「場所」は〈土地〉との出会いに基づいて可能である。つまり、人は場所と言う度に、実は自らが〈土地〉に存在し住まっていることをその都度了解しているわけである。

重要であるので、阪本（ibid.）の議論を繰り返すが、

この〈土地〉という概念は、地図や地球儀のように認知的に表象されるいわゆる「土地」とは決定的に区別されねばならない。現代において〈土地〉は表象されがちであるが、対象として〈土地〉を把捉することは根源的には不可能である。「地球」といった表象も、実は実感の伴うことのほとんどない科学的知識の域を越えるものではない。むしろわれわれは〈土地〉の上に投げ出され（与えられ）、高々それに対処しているに過ぎないと言わねばであろう。事実、〈土地〉は太古から人間を超越し世界とは無縁に広がっていると見なされてきたのである。かといって、〈土地〉とは空虚な思弁的概念などではなく、一方で足元に「地面」として、「用地」として、「原っぱ」として具体的に現象し体験されるものである。〈土地〉は、把捉不可能で世界と無縁な「隠れるもの」でありながら、人間に住まわれる文字通りひとつの根源的地平である。〈場所〉とはこのような〈土地〉が世界内の現象として出会われることそのものを意味しているのである。

5. 〈場所〉の存在論的解釈の心理学的意味

〈場所〉が存在論的に解釈された今、（心理学論文という性格に即せば）その解釈がもたらす心理学的意味、あるいは生活世界的な意味を明らかにする必要がある。

ここでは、(1)場所を通しての「理解」の可能性、(2)自己概念の場所論的拡張という2点について議論する。

(1) 場所を通しての「理解」の可能性—臨界モデル—

ここでは「理解」という現象を場所論的に解釈し、主体と主体という二項が認知的あるいは間主観的に結ばれるという従来の枠組みを拡張してみたい。ここでも手ごかりは「私の場所」の体験である。

〈エピソード的記述〉【T】とのようやくの出会い

【CUBE】の2軒隣に【T】という八百屋がある。ちりのみの際にはいつもここで野菜を仕入れるため、ちょっとした「契約青果店」となっている。その店はちよび髭（いつの間になくなってしまった）が特徴的なおじさんが経営している。なぜか私は、きんしゃい通りに来て以来ずっとこのおじさんが苦手だった。おじさんに特別話したいわけでもないのだが、買物のやり取りでもほとんど余計な会話がなく、何か気まずさが残るのだった。「ピーマンもらいます。」「はい、ありがとうございます。50円で一す」、でいつも終わってしまう。確かに、取っ付きにくく、いつもバタバタ忙しそうに動いていて落ち着かず、表情も少し堅いかもしれない。しかしそんな説明をどれだけしても、この気まずさは十分に言い当てられないように思う。ただこのおじさんとは「合わない」、

むしろこの一言に尽きるようである。

私は、この八百屋で買物をしたり店の前を通りすぎたりする度に、おじさんとなかなか目も合わせられないし、ただ気まずさばかりを感じていた。その気まずさは確かに良いものではないにしろ、だからと言ってそれを「改善」しなくてはいけないというほど気負ってはいなかった。確か何度かおじさんにあいさつをしたこともあった。しかしそのあいさつもあまり「いい感じ」になっていかない。むしろ気まずさが際立ってしまうだけであった。

そんなある金曜日の夕、例によって[CUBE]前の路上に椅子と七輪を張り出し、私はちりのみをしていた。準備も終わって椅子に腰掛け落ち着いていた頃だった、1台のタクシーがきんしゃい通りに入ってきた。

昼間は歩行者天国になっているきんしゃい通りも、この時間には、標識上では自動車の通行が可能である。しかしそれでもきんしゃい通りには、慣習的に商品が張り出されたままである。そして私も慣習的に七輪を路上に張り出している。こんな時に、タクシーがきんしゃい通りに進入してくることはよくあることだった。その度に私は七輪を引っ込め、「まったく、タクシーのくせに何も知らん」と自分勝手に憤っていた。それは私の個人的な憤りというよりはむしろ、自分がきんしゃい通りにいる人たちを代表して憤っているという感じであった。

この日もそんな風にタクシーが通りに入ってきた。私は七輪と椅子をタクシーがぎりぎり通れるくらいまで意地悪く引っ込め、タクシーが七輪の前を通りすぎる時に私はその運転手を逆上的に睨んだ。タクシーは七輪の横をぎりぎりで通りすぎた後も、次は八百屋[K]の前、その次は魚屋[F]の前、一 でその都度往生しては店先の品物を引っ込めてもらっていた。私は椅子に腰掛けたままそれを見送り、[CUBE]の斜め向かいで野菜を売っているおばさんに、同意を得るように「まったく、なんでも入ってくるんですかねえ！」と大きな声で話しかけた。するとおばさんが応える前に、2軒隣から【T】のおじさんの声で「バックした方がいいと思ったけど、やっぱりなかなか言えんもんねえ」と聞こえてきた。

私はその声に驚いた。そちらを向くと片づけ作業を始めたおじさんが店の陰から現われてこっちを向いている。私は瞬間的にこの事態を察知した。おじさんは私がおじさんに向けて話しかけたものと勘違いしたのだと。そしてこの瞬間に何かが一気に打ち解けた。私はどこか興奮して「そうですね」と少し大きな声でおじさんに応えた。すかさず斜め向かいのおばさんもこれに加わって突発的に3者の会話になった。それぞれが自分の店で(私は店ではないけれども)それぞれの作業をしながら言葉を発するので、頭を突き合わせた会話と違ってそこは何だか不思議な場になった。

それからしばらくして7時を回り、いつものようにお

じさんがトラックをとってきんしゃい通りにやってきた。そしてカゴなどを荷台の上に載せ終わると運転席に乗り込み、バララン!とエンジンをかけた。いつもならばそのままバックして帰ってしまうところだが、この日はトラックに乗り込んだおじさんを私の方からあえて見た。するとおじさんと目が合い、私が「お疲れ様でした」という意を込めて頭を下げると、フロントガラス越しにおじさんも頭を下げ、クラクションをプツと鳴らした。

【T】のおじさんが応えてくれた瞬間、1年以上続いた「気まずい」関係はごろっと変わってしまった。以来、あいさつも和やかでおじさんの笑顔も見るようになるようになった。冗談まじりの話もするようになった。それは、偶然きんしゃい通りに進入してきた迷惑なタクシーの「おかげ」なのだ。

〈脱自的思索〉

実存的歴史が臨界を迎える

この出来事は何の脈絡もなしに突然「発生」したわけではない。確かに1年以上の「気まずい」時期に私はおじさんとほとんど話をしていない。しかし、おじさんは1年以上にわたって2軒隣で毎週「ちりのみ」をしている私を見ていたはずである。この実存的歴史を経てようやくこの瞬間に「打ち解けた」のである。火花が散って反応が起きたというより、むしろコップにゆっくりと注ぎ続けた水がある瞬間にようやく溢れたというものであり、言うなれば「臨界」を迎えた出来事である。臨界を迎えてから振り返れば、私だけでなくおじさんもまたずっと気まずさを感じていたように思えてならない。そしてその気まずさの中でも、双方とも着々と水を注ぎ続けていたのだと思われてくる。

もちろんこの1年以上の間にも、私にその【T】がある「場所」として開かれていたことは確かである。当時の私にとって【T】は「ちょっと苦手なちょび髭のおじさんが野菜を売っていてちりのみの際に私が買い物をする場所」として、あるいは「合わない場所」として開かれていたのである。しかし2軒隣で「ちりのみ」をしながら【T】をそれなりに生きてきた私は、絶えず何らかの実存的歴史を沈殿させ続けていたのである。

同じ「場所」に共存在すること

そしてタクシーという偶然のきっかけによって、私の実存的歴史は【T】のおじさんと臨界を迎えた。それはまさに「合った」という瞬間であった。重要なことは、私とおじさんはそれまでにいわゆる「コミュニケーション」をほとんどとっていなかったことである。それにもかかわらず(ある水準においての)「理解」が可能になったのである。この実感は、おじさんの心理が理解されたというよりは、おじさんの生きる実存的歴史に私も出会う

ことができ、互いの実存的歴史があたかもひとつのものとしてこの「場所」で共有されているという実感である。ゆえにこの出来事は「ようやく話す機会が訪れた」という表面的で浅薄なものではなく、1年以上かけて沈殿した重厚な実存的歴史がようやくそこに住まえるものとして立ち現われ、互いが「同じ場所」に共存していることを体験されるに至ったというものである。

「おじさんとの気まずい関係がごろっと変わってしまった」という記述は、【T】という「場所」がかつと全く異なる「場所」として開かれていることを物語っている。

理解という現象の場所論的接近

従来「理解」について、例えば次のような解釈がなされてきた。1つ目は、他者に関する情報を取り入れて表象を形成するというモデル（認知モデル）であり、2つ目は、主体と主体が主にその情動を介して間主観的に理解するというモデル（間主観性モデル）である（e.g., 鯨岡, 1997, 1998）。これらのモデルと今議論されている「臨界」というモデルを、先にも登場した「水を注ぐ」というメタファーで比較してみたい。いま、仮に2つの主体を「赤い水の入ったコップ」と「青い水の入ったコップ」として考えてみる。

認知モデルでは、相手の水の「青」を自分のコップにも同じように実現することとして「理解」が考えられる。そこでは、いかに正確な表象を得ることができるか、つまりその青色の精度が「理解」の程度に反映される。間主観性モデルでは、赤い水と青い水を互いに注ぎ合い紫色を得ることとして「理解」が考えられる。そこでは、いかに主体が互いに相手に伸びていき、紫色がひとつの色として収束していくかが「理解」の程度に反映される。

さて、場所論的な解釈である臨界モデルにおいては、先にも触れたようにそれぞれのコップにおいて水を溢れさせることが必要である。それまでは別々の他者として存在するが、ある時を境に水が溢れ2つのコップの周りに紫色の水が浸される。ここでひとつの「場所」が開かれ、「同じ場所」にいる者として互いが理解されるわけである。この時コップの中の水はそれぞれ赤と青で異なっただけであり、間主観性モデルのように2つの水が渾然と混ざり合うほどに積極的な理解というわけではない。しかし「同じ場所にいる」というゆるやかな共同性に伴う理解は起こるわけである。これは単に互いが紫色の水に浸され「つながる」というだけではない。紫色の水を地としておのれの色を図として照らした時、臨界を迎える前後でその色に変化が起きている。いまその「青」という色は紫という地によって理解可能であり、つまりここでは自己が常に「他者と共存する場所」から規定されることも同時に表現されているのである。

(2) 自己概念の場所論的拡張

本論では、人間の脱自的地平としての〈土地〉が明らかにされた。現代、ひとはこの〈土地〉を「おのれの住まう場所」として出会うことを忘却しているように思われる。確かにひとは実践的及び日常的に「場所」に住まううちで〈土地〉と出会ってはいる。しかしそれは、例えば建物を建てる「用地」として、レクリエーションや買い物ができるという「機能」として、投資する「財産」として出会うことが目立っているのではないか。

これに関してハイデッガー（1962/1965）も次のように述べている。“或る地帯は石炭や鉱石の採掘のために挑発される。その地域は今や石炭鉱区として、その土壤は鉱床として、自らの姿を露わに発しているのである。”（ハイデッガー, 1962/1965, p.31）“しかしひとは反対するだろう、一やはりライン河は依然として、風光の流れであると。そうかもしれない。しかしどんな風にか。畢竟それは、レジャー産業がそこに仕立てあげた旅行団のための、いかようにも仕立てられる観光用の対象物以外の何ものでもない。”（ibid., p.33）

今や〈土地〉は「～のために」という有意義性によって規定され、「場所」は道具的で交換可能なものとして存在し、それゆえ場所という言葉は単にある地点を指すに過ぎないのかもしれない。このとき、人間がむしろ〈土地〉に投げ出されているという事実は忘却され、〈土地〉は対象化され表象されるに至る。〈土地〉は均質に均されているかのごとく見立てられ、意味あるものは単に実体的な建築自体や機能であると見なされる。このような〈土地〉の規定に基づいて、文化財としての民家の移築や、どこかの「場所」をモチーフにしたテーマパークの建設が行われていると考えられる。しかし、この場合よくされる「土地の文化に配慮した建設」といった言説は、実存的歴史が表象ではない以上、それで解決する問題ではないだろう。実存的歴史は住まうことによるのみ、脈々と生きられる意味としてその都度「場所」に展開させることによってのみ、持続可能だからである。これらの現象は、レルフ（1999/1976）が「没場所性」と呼ぶように、おそらく〈場所〉の本質が忘却されることに直結する問題である。

実存的歴史は「場所」の歴史であると同時にそこに住まう現存在の歴史でもあるから、このような「場所」の問題はいわゆる「環境」の問題にとどまらない。このような〈土地〉規定に基づく建設によって、それ以前に沈殿してきた実存的歴史はもはや住まううちで展開され得ず、せいぜい露骨に立ち現われてくるか、それすらも不可能となり完全に失われてしまうかもしれないのである。

この時われわれは自己も失ってしまうのではないだろうか。「場所の喪失」の問題は、先に存在者の欠如として触れられたことであるが、今やこの「喪失」の出来事

が、〈場所〉の根源的意味すなわちいかに〈土地〉が規定されるかという存在論的地平から解釈することができる。「場所の喪失」の第1義の意味は、いわゆる居住空間の喪失でも社会的ネットワークの喪失でもなく、自己を構成するおのれの実存的歴史の喪失を意味するのではないだろうか。

一方、健康器具体験販売店に【S】がおのずと見出されたり、立ち会っていない[CUBE]の変化について「Yさんだ…」という直感が起こったりしたように、「場所」が実存的歴史の展開とともに生起するのは、〈土地〉が「おのれの住まう場所」として出会われることを契機としている。この時、世界は均質どころか、むしろ同じ「場所」は2つとないと思えるのは極めて妥当であろう。しかもそれは均質な「地面」の上に付された機能や主観による意味付けの多様性ではなく、人間を超越する〈土地〉に基づけられた実存的歴史の多様性である。われわれはこのように〈土地〉によって自己を取り戻す可能性もあるのである。

6. 結 語

住まいの具体的なかたちは実存的歴史が顔を覗かせてきたものであり、その「場所」の様相を手がかりに実存的歴史を開くことができる。これは、知識を獲得して解釈するという理解ではなく、理解可能な「場所」すなわち「他者と共存在する場所」がおのずと臨界を迎えて開かれるのを、「おのれの住まう場所」として住み続けることによって「待つ」というアプローチである。このような「場所」を介する理解のアプローチは、直接的な「コミュニケーション」を介しての理解とは質の異なるものであるが、今後も議論する意味のある重要な問題であると思われる。今日の「場所」にまつわる様々な問題

にとって必要なのは、〈土地〉という地平に降り立つことではないだろうか。

文 献

- ハイデッガー, M. 小島威彦・アルムブルスター (共訳) 1965 技術論 (ハイデッガー選集18) 理想社 (Heidegger, M. 1962 *Die technik und die kehre. Pfullingen: Neske*)
- ハイデッガー, M. 細谷貞雄 (訳) 1994 存在と時間 (上・下) 筑摩書房 (ちくま学芸文庫) (Heidegger, M. 1927 *Sein und zeit. Halle a.d.S.: Niemeyer*)
- 鯨岡 峻 1997 原初的コミュニケーションの諸相 ミネルヴァ書房
- 鯨岡 峻 1998 両義性の発達心理学—養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション— ミネルヴァ書房
- レルフ, E. 高野岳彦・阿部隆・石山美也子 (訳) 1999 場所の現象学：没場所性を越えて 筑摩書房 (ちくま学芸文庫) (Relph, E. 1976 *Place and placelessness. London: Pion.*)
- 阪本英二 2002 場所の存在論的解釈：「私の場所」としての箱崎商店街きんしゃい通りを手がかりに 九州大学大学院人間環境学府修士論文 (非公刊)
- 阪本英二 2003 場所はいかに歴史的に生きられるか：「私の場所」を手がかりに。人間・環境学会第10回大会
- 阪本英二 2004a 「土地」との出会い：〈場所〉の存在論的解釈 九州大学心理学研究, 5, 133-143.
- 阪本英二 2004b 生きるという方法：心理学にとっての現象学 日本心理学会第68回大会発表論文集, 23